

國民修身書

尋常小學生徒用

卷八

創立七十周年紀念

牛萊生寄贈

福岡第一師範學校

(寄贈圖書)

登錄 番號	第	號
社會科學門		
教育部		
教授法	款	修身項
目		次
全	1冊	1冊
分類 番號	第	34269號
372 /		

3

T1A3

22

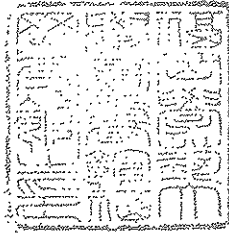
A 99

圖書 和圖書 迦

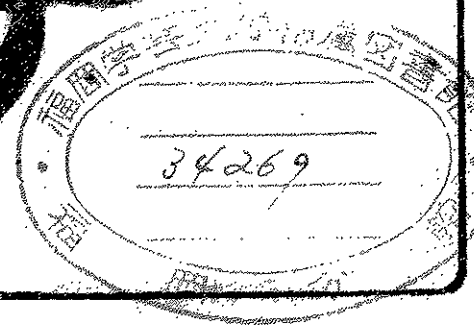


a 1 3 8 0 3 2 8 9 7 1 a

福岡教育大学蔵書



忠孝



安積五郎
田中登作

合著

國民修身書

卷八

教育書
專賣所

東京 普及舎

學部小學生使用

源齊略

例言

一、本書ハ教育ニ關スル 勅語ノ 聖旨ニ基キテ
著シタルモノナレバ每卷ノ首ニ忠孝ノ二字ヲ
冠セリ

一、本書ハ日本臣民タルニ缺クベカラザル徳性ヲ
涵養スルヲ以テ目的トシタルモノニシテ小學
校ノ教科用書ニ供スベク又家庭ニ在リテ子弟
ヲ教訓スルノ用ニ供スベキモノトス

一、本書ヲ用フルモノハ徒ニ字句ノ誦讀ニ止マル
コトナク教師父兄自ラ模範トナリテ其ノ實行ヲ

勉メシメンコトヲ要ス

一本書ニ掲ゲタル格言ハ善ク之ヲ諳誦セシメ事
ニ臨ミ機ニ應ジテ身ヲ處スルノ規矩トナサシ
ムベシ

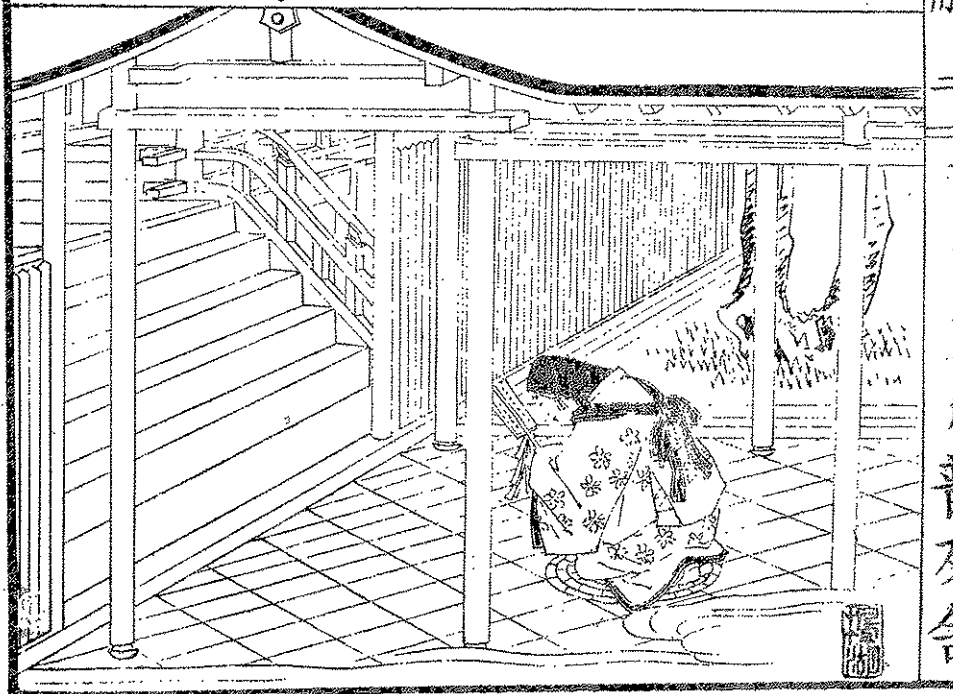
一本書ニ掲ゲタル實例ハ固ヨリ要略ニ過ギザレ
バ其ノ詳細ハ教師父兄ニ於テ口授センコトヲ
要ス

第一課

父母は子の幸福を以て己の
幸福となす。

たやはつねにわがこのーあはせをいのりを
ものにてわがこのーあはせなるときはこれを
わがーあはせなりとしてふろこぶものなりさ
ればこたるものはべんきやうしてみをたてー
あはせふきみぶんとなりておやをふろこばー
むるやうころがけざるべからず。

大江^{おほえ}舉^あ周^{しう}は、母^{はは}を赤^{あか}染^{ぞめ}右^{みぎ}衛^ゑ門^{もん}といふ、舉^あ周^{しう}、やまひにかゝりて、あやふかりしとき、母^{はは}がはらんといのるいのちは、をいからで、さてもいかれん、ことぞかなしきといふうたを、住吉^{すけよし}神^{かみ}にたてまつりて、うの身がはりにならんことをいのりたり、舉^あ周^{しう}、やまひいにてのち、このことをきゝ、かくては母^{はは}のいのち、あやふかるべうとて、また母^{はは}の身がはりにならんことをいのりたり。



子はよく、父母の心を以て、心
とすればすなはち孝なり。

たやのわれらをいつくまるとは、ありがたきもの
にして、ことばにつくさるべきものにあらざれば、こ
たるものは、まことのこころをもつて、たやにつかふ
こと、おやのわれをいつくまるとが、ごくすれば、か
うくのみにかなふなり。

第二課

よく、夫に事ふるを、負と

いふ。

つまたるものは、なにごとをもつとのころにたがふことなく、をつこのはぢにならぬやう、をつこのみのーあはせとなるやう、ころをつくいて、つかふべきものとす、これ、つまたるものゝみちにして、いとはいふなり。

江戸傳通院のほじりに、孫七

といふ大工ありて、ろの妻をそめといへり、夫は、やまひのため、にみゝとほく、あーもふどいうにて、いごともできがたければ、そめは、きみのほと、まつかうとをうりあるき、よるは、ひめのりをこーらへて、くらゐをたてをりーが、草津のゆはきゝめありときゝ、ひたすらわざをはげみ、すこーづゝのたくはへをつみたきて、たうぢにつれゆきゝとる。



婦は舅姑に孝なるべし。

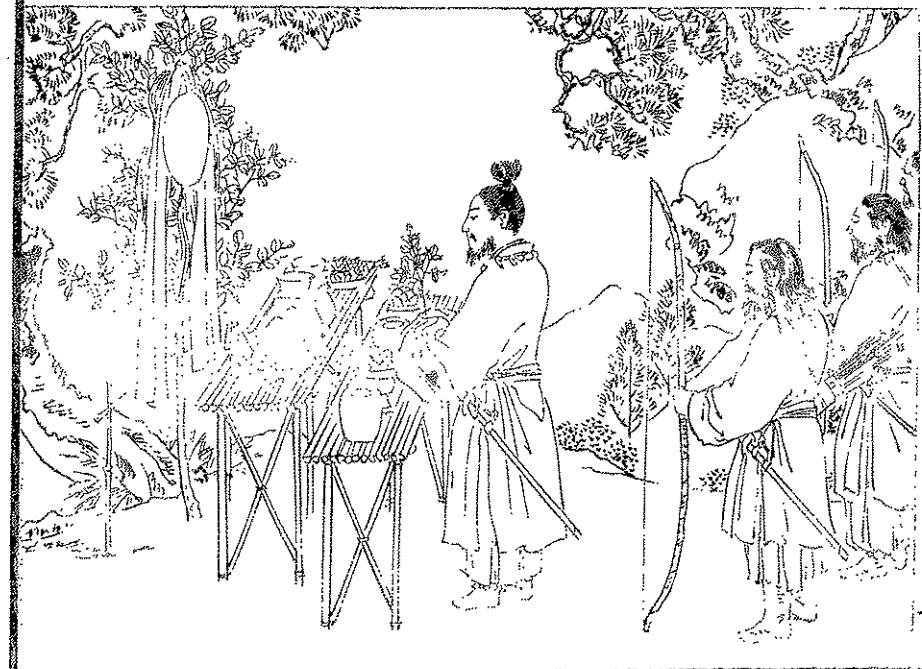
をんなのふめいりたるときはふめいりさきのし
うと一うとめは、すなはちわがちはなれば、ま
ことのれやにつかふるがごとく、まことのこころ
をもつて、かうくをつくすべきものとす。これよ
めの、一うと一うとめにつかふるみちにて、また
をつとにつかふるみちなり。

第三課

我が身は祖先の遺體なり。

わがからだは、れやののこされたるからだにて、れ
やのからだは、またろのおやせんがよりのこさ
れたるものなれば、わがからだは、とりもなほさ
ず、せんがののこされたるからだなり。さればわ
がみをたいせつにして、れやせんがのなをけが
さぬやうにせざるべからず。

神武天皇もろくのてむかふ
ものをうちほろぼして大和の
國にいり、橿原の宮にたいて天
皇の御位につきたまひみこと
のりして、かくすみやかにて
むかふものゝたひらぎてよの
なかのいづかになりぬるは、せ
んずのみたまのたすけによる
ものなれば、これをまつりて、
孝のみちをたつべしとて、ま
つりのばしを、鳥見の山に
まうけて、ごせんずをまつり
たまひとす。



祖先を祭るは、孝の道なり。

トぶんのからだは、おやせんずよりのこされた
るからだにて、うのごねんは、まことにふかきも
のなれば、たやせんずのいまゝどきのごとく、
よくこゝろをつくりて、これをうやまひまつら
ざるべからず、これが、うくのみちなり。

第四課

奴婢をつかふに、は、めぐみふか
くして、禮は、きびーかるべー。

げなんげぢよなど、すべて、めーつかひのものに
は、たもひやりのこゝろをさきとーよくいたは
うて、めぐみをくはへいへのさはるをきびーく
たてゝみだれぬやうにするをよろーとす。

川井東村の家に、一人のやと
ひをどこあり、たちはたらく
ことはほかのものにすぐれ
たれども、うまれつきあらくし
くして、人をあなどるくせあ
り、かるを東村、すこーも
せめずして、たゞふかくな
でいつくーむのみなりし
が、数十日をふるうちに、を
とこみづからはづる心をた
こーのちたのづかられいぎ
あるまめやかなる人となり
しとぞ。



奴婢をつかふに、禮を忽にすれば、侮りて罪を犯しやすし。

げなんげぢふなど、すべて、ひとをつかふに、あまりゆるやかにすぎて、いへのさはふを、なほざりになし、たくときは、かへつて、いゆどんをあなどりて、あしきことをたこなひ、つみどがをたかすやうなることあるものなり。

第五課

男子は雄壯なるべし。

をどこは、うまれつきの、をよりきものなれば、うのことばをも、たこなひをも、をどこらよりくせざるべからず、をどこにして、ことばや、たこなひの、をんなのやうなるは、まことにみにくきのみならず、をどこのうまれつきに、うむけるものなり。

日本武尊は身のたけはなほ
だたかく、なあくまでつよく、
たけくを、きこと、たほく
の人、にすぐれたまへり、御父
景行天皇のみことのりをり
けたまはり、十六歳のとき、熊
襲をうちて、うのかしらをさ
しころ、二十九歳のとき、
東夷をうちて、ことごとくこれ
をたひらげたまひ、天皇の
みために、ちからをつくし
て、大に、いさを、あげたま
ひとぞ。



女子は、優美なるべし。

をんなはうまれつきのたふわく、やさしきものなれば、
うのことばをも、たこなひをも、をんならしく、やさしく
せざるべからず、をんなにして、ことばや、たこなひの、
をどこのやうなるは、まことにみにくきのみならず、
をんなのうまれつきにそむけるものなり。

第六課

體力の強壯を計るべし。

ひとは、からだをトやうぶにすべきは、いふまでもなきことながら、トやうぶがうへにも、トやうぶにやしなひきたへて、にほんのたまもしてはづかからぬやうになし、れかざるべからず。

ペルリといふ亞米利加人のきたりしとき、わが國より、米をねくらんとて、これを、すまふとりに、はこばせたり、うち、白真弓、小柳の二人は、一どに、六俵づゝはこびぬたりければ、かの國の人々、これを見て、ともなひきたるつよきもの三人と、小柳と、すまふをどらせけるに、小柳は、一人をわきにはさみ、一人をうたに、いき、一人をさしあげて、ちからのほどをあらはしとり。



體力強壯ならざれば、事を成し難し。

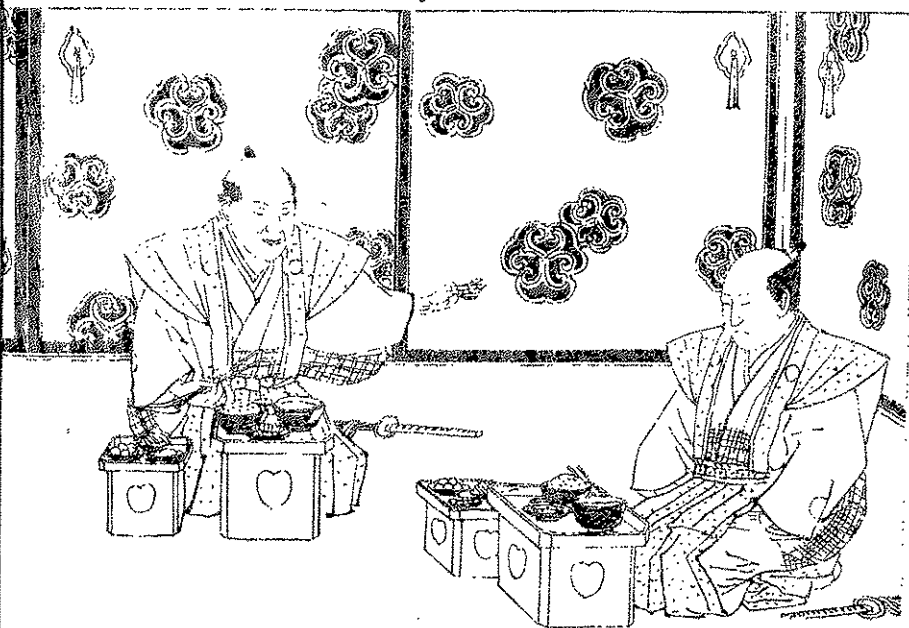
いかにがくもんををさめて、ちきみをみがくとも、からだのトやうぶならざるときは、うのちきをもちひて、ことをなすことのできぬものなれば、がくもんををさむるとともに、からだをトやうぶにせんことを、こゝろがけざるべからず。

第七課

労働する人は、粗食も味あり。

からだをうごかして、しごとをするは、ひとのかくべからざるわざにて、かくするときには、ちのめぐりもよく、ひものゝこなれもよくなるゆゑ、りまつなるくひものをたべても、はなはだうまきものなり。

徳川家光の日光山へまうで
—とき、たほくのはくだ
されたるれうりをくひーに
水野監物といふ人のみはわ
れは、しやうどんぎらひなり
とて、くはざりければ、内藤帯
刀といふ人、監物にむかひて、
大坂陣のとき、れんみの父は、
くうふくなりとて、われらの
けらいのたべかけのやきめ
しをくはれしことありとて、
大に、ろのこゝろにちがひを
いましめしとぞ。



怠惰なる人は、美食も味なし。

からだをつかはずして、たこたりをるものは、ち
のめぐりもあーく、ふくもつのこなれもあー
く、たべたしとたもふこゝろのす、まぬものなれ
ば、いかほどうまきものをたべてもさのみり
まからぬものなり。

第八課

己が心にかつものは、かならず、
能く、人にかつ。

トぶんにて、トぶんのよくをたさへ、これはすべから
ざること、これはすべきこと、はんだんして、よくの
ために、まゐることなきものは、ひとにもまさり、
ひとにもかつものなり。

池田輝政は、なだかき大將な
り、かくむきなどのつひにを
はぶきて、さふらひをまた
め、かゝ江にけり、あるとき、
人にかたりけるは、わがけら
いには、へいぜい、よくめぐみ
をかけ、たけることなれば、た
たかひにのぞみても、かなら
ず、ちゆうぎをつくすなるべ
し、それゆゑ、われは、トぶんの
なぐさみをたさへて、そのつ
ひにをいくさのりなへにも
ちふといひ、とぞ。



身を修むる要は、私欲を制するにあり。

のみくひなどのよくをほーいまゝにして、たどりわがまゝなどをはたらくは、みをあやまるも、こにて、みをさむるに、もつともたいせつなることは、これらのよくをたさへて、ほどよくするにあるなり。

第九課

自^ラな^ラ得^ラらるゝ事は、自^ラ之^ラをなせ。

ものごとには、ドおんにてできぬこと、ドおんにてでくるところあれば、うのドおんにてでくことは、ひとにたのむことなく、かならず、みづからてをくだして、これをなさざるべからず。

二宮金次郎にのみや きんじろう十六歳のとき、みなごとなり、ゑんるゐの萬兵衛まんべいといふ人にやゝなはれ、がひるは、うのゝごをたすけよるは、學問をなしたりしかるに、萬兵衛は、油をつひやすことををゝみて、夜學をさゝどめ、かば、金次郎は、川ばたのすたれたる地をほり、こゝて、なたねをつくり、これをうりて、油をもとめ、萬兵衛の油をつひやさずして、は、どめのごとく、學問をなゝどろ。



人に頼りて、事を成す者は、
人に頼りて、敗る。

トぶんにてなすときは、トぶんによくゝとげうべ
きゝごとも、ひとをたよりとて、これをなさんと
するときは、なるもならぬも、さきのひとしだいなれ
ば、かへつて、うのひとのために、ゝとげられぬこと
あるものなり。

第十 課

世界は、大學校なり。

よのなかには、いづれさまぐのことがありて、これにであひては、わがちををまゝ、かれにであひては、わがわざをみがくななど、よのなかは、あたかも、だいがくかろのごときものなり。

二宮金次郎は、家まづいゝて、學問は、ひとりたばにねぼけのみにて、いゝやうをとりいことなし、されども、をさなきときより、いづれのなきにであひて、ちををみがきい、かば、大に、よのなかのことに、つうと、ことに、土地をひらきて、さんぶつをふやすことに、たくみなるにいたり、すたれたる家を、わこい、まづいき村をとますなごうのてがら、すくなからざりいこと。



困苦は良師友なり。

なんぎなるめにであふときは、うのたびごとに、
ちゑをまゝして、わがみのねこなひをもあらため、
わがみのはげみともなるものなれば、なんぎな
ることは、わがみにとりてよきことといふべく、
よきともたちともいふべきものなり。

第十一課

事を處するには果斷なる を貴ぶ。

ものごときをとりはからふには、うのはじめをはり
をぶくかんがへたきかくせばよかるべしといふ
ことのかんがへつかば、いふやなく、たちになこ
なふをよろこぶ。

後宇多天皇のとき、元の國よりつかひをたこせてわが國をしたがはしめんとせしことあり、北條時宗ふれいなりとて、これをしりぞけしが、あばくきて、やまざりしかば、心をけつして、あるひはたひかへし、あるひはきりこりたりかくて、元は十萬の兵をひきゐて、わが國にあたせしが、時宗ごちくこれのうちほろぼして、そのいきほひをくちきとぞり。



果斷なるときは、後艱なり。

かくすべしと、かんがへのつきしことをいふや
なくすつかりとたこなふときは、ものごとすみ
やかに、きまりのつくをもつて、よりより、また
げのくることなく、のちのなやみとなることな
きものなり。

第十二課

義を見て せざるは、勇なき
なり。

くにのため、きみのためなどにつきて、ひとたるもの、
せねばならぬ。あひにのりまば、いかなるあやふきこ
とありとも、すゝんで、ちからをつくすべきものとすか
かるばあひにのりみて、ちからをつくさぬは、ゆうきの
なきといふものなり。

兒嶋高徳後醍醐天皇の、隱岐
の國にうつされたまふとき
きかゝるときに、ちからをつく
さざるは、ひけふのふるまひな
りとして、みちにて、天皇をうばひ
たてまつらんとし、二どまでも
天皇のすぎさせたまふみち
に、まちゐたれども、うのこと
ならざり。かば、よにまざれ
て、天皇のかりみやにいたり、
櫻の木をけづり、二句の詩を
かきつけて、己がころをの
べたりとぞ。



勇者は懼れず。

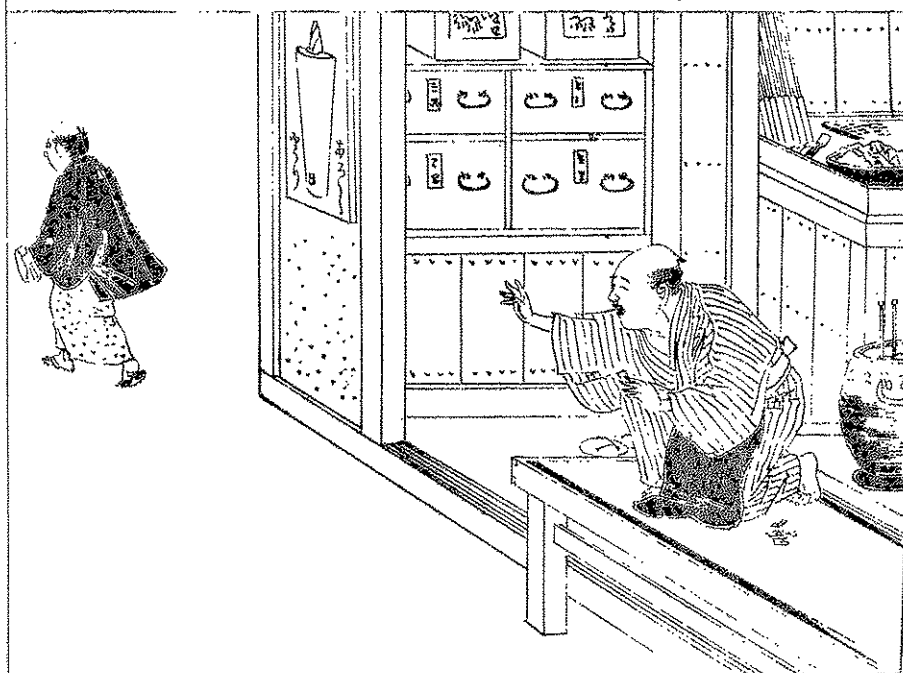
ゆうきのあるひとはいかなるあやふきところにも
ぢむともいかなるれろろーきてきにてあふともれ
うるゝことなきものなりゆゑにひとはつねにゆう
きをやりなひて、ことあるとき、すんでくのため、
きみのために、ちからをつくさんことを、こゝろが
けざるべからず。

第十三課

利を見て、其の義をかゝず。

ひとにはたれもよくのこゝろありて、とかくりはきには、
まよひやすきものなれども、うのりにきには、とるべ
きものゝとるべからざるものとあれば、とるべから
ざるものをとりて、うのすぢみちをかくやうなると
とあるべからず。

江戸に、蠟燭屋四郎兵衛といふものあり、あるとき、百兩の金をひろひ、やうやくねど、ぬゝをたづねて、わたゝが、ねど、ぬゝは、大によろこびて、うのうち拾兩を、いにいだゝけれども、四郎兵衛は、いなみて、うけざり、かば、一兩を、ねきて、にげゆきたり、四郎兵衛は、かへさんにも、うのゆくへの、れざり、より、これを、錢にかへて、ねほくのまづ、きものにあたへ、どろ。



貨悖つて入るものは、亦悖つて出づ。

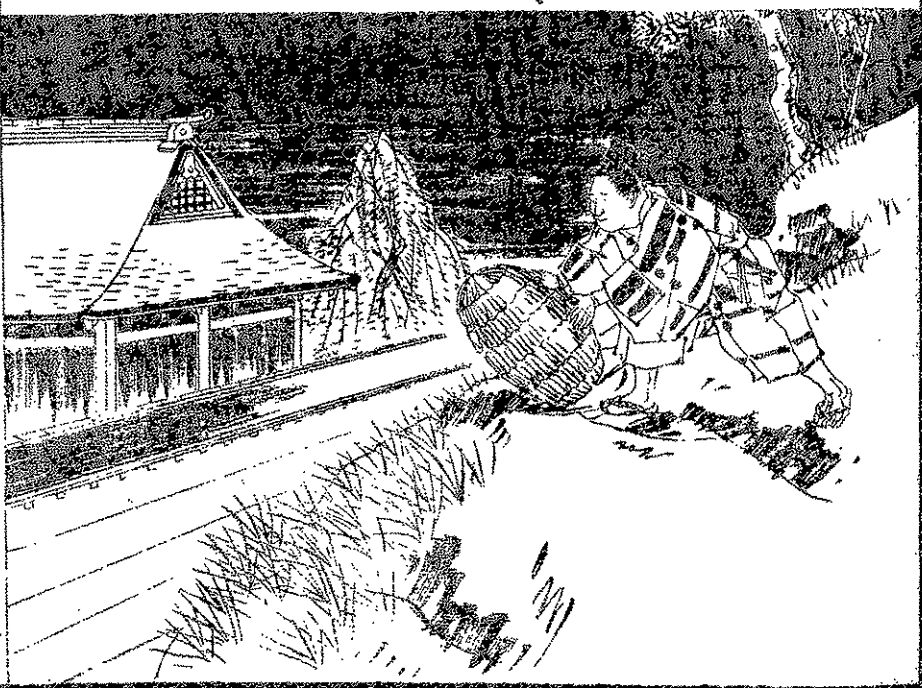
だうりにもとつたことをなして、ためたるぜにかねなどは、ながくたもつことのできぬものにて、たとへいちどは、うれがために、とみさかゆることあるも、いつか、また、だうりにもとつたことのために、うゝなることあるものなり。

第十四課

廉士は財を愛せざるにあらず之を取ることを道による。

わたくしのころなまきたるきひといへどもせ
にかねなどのたからを、あいせざるにはあらざれば、
とるべきみちあるときは、どれどもとるべきみちな
きときは、とらざるなり。

青砥藤綱は、北條時頼につかへ
一人なりあるとき、一人のさぶ
らひうつたへをたこし、がりの
こと、時頼にかゝりあひあるをも
つて、たほくの役人は、さぶらひ
のはりを、まけとせり、あかるに、
藤綱は、そのすぢみちをたゞして、
かちとさばき、かば、さぶらひ
は、これを、だんに、たもひ、錢三百
貫文を、人あれず、藤綱のやゝき
になげこみ、藤綱は、くべ
きだうりなりとて、たくりかへ
しとす。



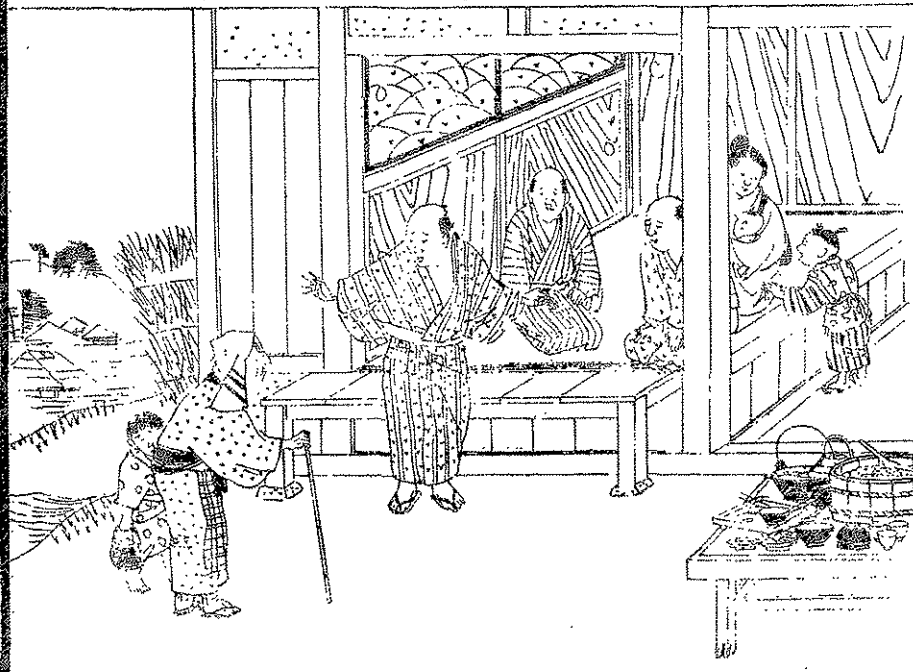
廉潔にして、貧賤なるは、不義
にして、富貴なるにまさる。

みのまづきは、もつともいふべきことなれども、
りをかきて、ふうきとなるは、また、もつともいふべき
きことにて、このふたつをくらぶれば、わたくしのこ
ろなくして、まづきは、ふびりなることなりて、ふびり
なるには、はるかにまされるものなり。

第十五課

人を愛し、人を利するものは、
必^ズ福あり。

ひとのために、いんせつをつくし、ひとのために、
きとなることをはかるは、よきことなひにして、うの
ときは、ほねのなる、こともありがねのつひゆるこ
ともあるものなれども、いつか、かならず、みのあは
せとなることあるものなり。



人を惡み、人を賊ふものは、必ず禍あり。

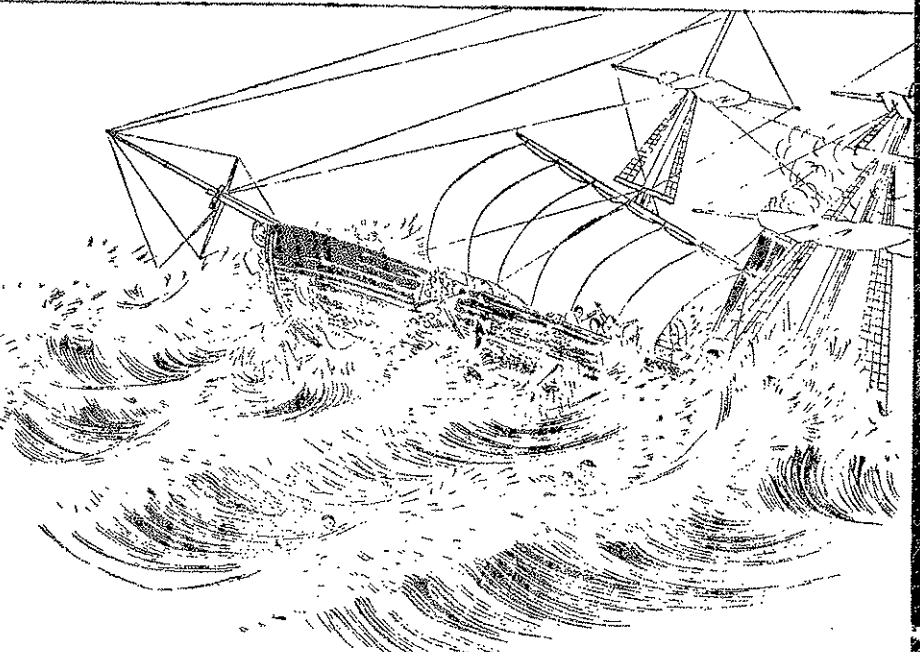
ひとにたいして、ふゝんせつをはたらき、ひとにたいして、あゝきゝむけをなすは、あゝきたこなひにして、たとへ、これがために、いちどは、つがふのよきことや、りねきとなることなどあるも、いつか、かならず、みのわざはひとなることあるものなり。

第十六課

國際の親厚を圖るべし。

いまのよのなかには、むかーとはちがひて、ぐわいこく
とつきあひをするときなれば、ぐわいこくのひとに
たいして、れいをうーなはぬやうに、よくつきあひ、
にどくにどのつきあひの、ますくーたしくなるや
うにせざるべからず。

西洋のトルコといふ國の皇帝
より、わが天皇陛下に、勲章をた
てまつりーことあり、そのとき、
紀州の海にて、なんせんー六
百人あまりののりこみのうち
わづかに、五十人あまりたすか
りて、そのよは、みな、たぼれーに
しかば、陛下は、これをあはれみ
たまひて、かの國にたくりとい
けさせたまひ、又、わが國の人々
は、かねをあつめて、ーたるも
の、みよりに、たくりあたへし
とす。



國際の平和を願ふべし。

くにどくにどのつきあひは、すこゝのまちがひより、
たほいなるあらうひとなりて、いくさなどのたこる
ことあるものをなれば、ぐわいこくのひと、つきあふ
には、よくきをつけて、まちがひなどのたこらぬやう
にせざるべからず。

第十七課

我が日本の國權をたもて。

わがにほんのくには、もとより、にほんのくにだけの
かくしきといふものあれば、ぐわいこくとつきあひ
をするには、このかくしきをたもたぬやう、ぐわいこ
このものに、あなごられぬやうせざるべからず。

菟道稚郎子^{うみちのわかしら}は、應神天皇^{おうじんてんかう}の皇子にして、學問にひいでたまひいたんかたなりあるとき、高麗^{こま}の國より表文^{ひょうぶん}をたてまつりしが、皇子^{みこ}これをよみたまひけるに、うのうちに高麗王^{こまのわう}日本國^{にっぽんこく}にきふといふいとおれいなることばありしかば、これわがくにのかくきをうこなふものなりとのたまひて、たちどころにその表をひきさき、うのつかひをせめて、たひかへしたまひしとぞ。



我が日本の獨立を たもて

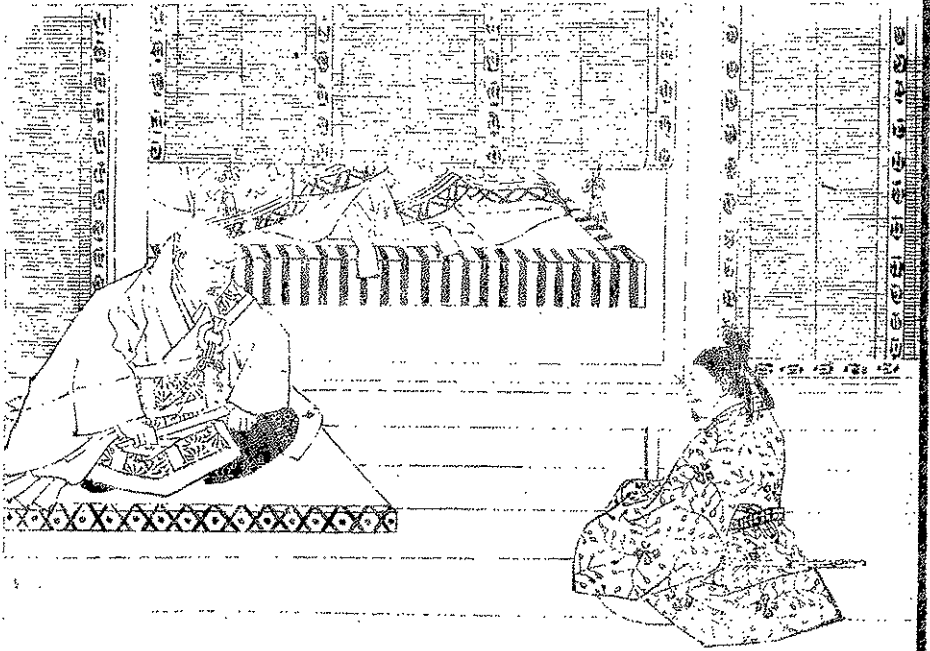
わがにほんのくには、むかしよりぐわいこくにいたがひーことなく、せかいのうちにふたつとなきたふときくになれば、われらーんみんなるものは、ぐわいこくにせめれたかされぬやうに、ちからをつくさるべからず。

第十八課

我が國は、萬世一系の天皇の
一ろ一めす所なり。

わがにほんのくには、くにのひらけは、ゆめより、この
くにのあらんかぎり、いくまんねんののちまでもれ
んちすぢの、かはらせられぬてん一さまのをさめた
まふところなり、されば、じんみんたるものは、ふかく、
これを、こゝろに、いるさぐるべからず。

稱徳天皇のとき、僧道鏡よこ
しまなる心をいだきて、天皇
のくらゐにつかんとせしか
ば、和氣清磨、みことのりをう
けたまはりて、宇佐八幡宮に
つかひ、がみのみつげをう
けかへりて、わがくには、いに
しへより、君と臣とのわかち、
あきらかにさだまりをれば、
あまつひつぎは、天皇の御ち
すぢをたて、はやく、ぶだう
の臣をつみせよ、ときこにあ
げしとぞ。



日本の國體は、世界に比類なき 尊き國體なり。

わがにほんのくには、かみにはむかしよりたんちす
ぢのかはらせられぬてんーさまをいたゞきしもに
は、せんずいらいちゆうぎをもつてつかへまつるし
んみんありてきみとたみとのさだまりもたゞしく
ろのーたりみもあつくひろきせかいのうちにくら
ぶへきところなきたふとぎくにがらなり。

第十九課

我等は、皇祖皇宗に忠良な りー臣民の子孫なり。

われらは、てんーさまのごせんずさまにつかへまつ
りて、ごせんずさまのねんめぐみをかうぶり、ちゆう
ぎをつくーたるーんみんのーうんなり、さればわれ
らも、ちゆうぎをつくーて、せんずにはぢざるやうに
せざるべからず。

神武天皇の大和にいらたまはんとせーとき、長髓彦といふもの、饒速日命をきみとあふぎて、天皇のみいくさにいむかひたり、饒速日命のち天皇は、日本のまことのたほきみなることをしりーかば、長髓彦をころして、天皇にしたがひまつりけり、今の物部氏のせんろは、この饒速日命にて、ろのほか、諸氏のせんろも、みなふーの天皇につかへまつりて、忠良なりしものなり。



天皇に忠良なるは、祖先の遺風をあらはすなり。

われらは、てんーさまのごせんろさまのたんめぐみをかうぶり、ちゆうぎをつくーたるものーろんなれば、いまのてんーさまのために、ちゆうぎをつくすは、われらのせんろのむかーよりのこーつたへたるならはーをあらはすものにて、かくするは、てんーさまへのちゆうぎなるのみならず、たやせんろへのかうくなるなり。

第二十課

我が國を、世界第一の富國となせ。

わがにほんのくにうまれたるものはわがにほんのくにをどまさんことをはかるは、もちろんのことなれども、せかいのうちに、とめるくには、たくさんあれば、うのとめるくによりも、はるかにまさるいちばんのとめるくにとなさざるべからず。

徳川齊昭は、わが國をたもふ心ふかく、大に、さぶらひの心をひきたて、大砲軍艦をつくりて、國のうなへをなせりかつて、蝦夷地に、たみをうつし、土地をひらき、産物をたこつて、大に、とめる國となし、又、露國のふせぎをなさざるべからずとて、うのはかりごころを、幕府にまうしたてたり、されど、うのこともちひられざりしかば、ころろざりあるものは、みなこれをしてしみてぞ。



我が國を、世界第一の強國となせ。

わがにほんのくにうまれたるものは、わがにほんのくにをうつくせんことをはかるは、もちろんのことなれども、世かいのうちにつよきくには、たくさんあれば、うのつよきくによりも、はるかにまさるいちばんのつよきくにとなさざるべからず。

大尾

國修八

明治三十四年十月廿六日印刷
同 年十月廿七日出版

版權
所有

著者

安積五郎

東京本郷區駒込西片町十番地

著者

田中登作

東京神田區柳原河岸十四號地

發行者

辻敬之

東京下谷區練堀町六十八番地

印刷者

沼尻為作

東京神田區柳原河岸十四號地

發兌

普及舎

C 1
52
(8)

